

北海道民話の研究(その1)

阿部 敏夫

鍵語 北海道・民話・民話研究者

目次

序章

第 節 問題の所在

第 節 北海道の自然・歴史・文化

第 節 民話の性格・特質・伝承事情

第 節 北海道民話研究小史

まとめ

阿部敏夫関係引用・参考文献一覧

序章

第 I 節 問題の所在

北海道民話は、北海道の文化形成の進展とともに伝播・変容・定着・創造を行ってきた。

その北海道文化は、1. アイヌ文化 2. 和人文化 3. アイヌと和人の複合文化、4. オホーツク文化、5. 山丹文化、6. 北前船文化、7. 海外（とくに明治以降の）文化によって成り立っている¹⁾。

本論は、2. 和人文化の形成における「民話」の内容・果たした役割について考察したものである。本論の研究の現状は、民話の発掘と整理の段階であると考えている。まだ、調査地域が点在していること、現時点までに発掘・整理された民話の分析がほとんどなされていないという現状である。たとえば、民話の発掘地域と民話の文芸性・教訓性等との関連の分析、伝承事情と村落形成との関連研究はまだ手がつけられていない状況であるからだ。

その問題解明を追究しようとする基礎作業が本論である。第 節では民話の生み出された地域社会解明、第 節では、「民話」という言葉の使用内容が、現在あいまいな使われ方しているの、その「民話」内容について考察した。第 節では北海道民話研究に関わった人びとの歴史と内容整理を試みた。

第 II 節 北海道の自然・歴史・文化

1. 名称と自然

北海道はもと蝦夷ヶ千島などと呼ばれ、北方領土も含めた散在する島々を指した。島々を除く現在の北海道は蝦夷島の名で呼ばれていた。ところが16世紀末、秋田の安東氏から独立した蠣崎氏が姓を松前と改めてから松前蝦夷地と呼ぶようになった。そして明治政府は松浦武四郎の意見書を採用して1869年（明治2）8月15日北海道と改めた。総面積は8万3514.86平方キロメートル（北方四島を含む）で、わが国の22%を占める。本州の東北六県と新潟県とを合わせた面積にほぼ相当する。人口は2002年6月末北海道広報広聴課統計によると約570万（男270万、女300万）人、世帯数約250万となっている。

緯度はヨーロッパの地中海地帯にあたるが、千島海流やリマン海流という二寒流の影響で寒冷地帯である。北アメリカの北部ニューイングランドからセントローレンス川の下流地帯ともとても似ている。さらに、周囲がオホーツク海、日本海、太平洋といった寒流・暖流に囲まれている。従って、本州以南の地域と

異なるし、北海道地域内でも異なる特色をもっている。日本海沿岸地域は対馬暖流の影響で比較的温暖だが、冬は季節風の影響で吹雪が多く、場所によっては積雪3mを越す所もある。太平洋沿岸地域は積雪は少ないが凍結度が深く、農作業の着手が遅い。沿岸近くの地域は海霧が発生し、寒地作物の畑作や牧畜が中心となっている。オホーツク海沿岸地域は年間降水量が少なく、親潮やサハリン寒流の影響による低温で、農作物も限定されている。内陸部は北部と南部では気候等も異なるが比較的温暖である。南部の渡島半島(旧和人地)では、東北・北陸地域とほぼ同様な技術で米作その他の生産が可能であるが、北部や東部では特殊な品種や技術を必要とするし、作物も異なる。従って、自然も、歴史も、文化も、当然生活も多様である。北海道民話の研究にはこの「北海道」の多様性を理解したうえで行わなければならない。

2. 歴 史

和人が北海道に移住してきた時、アイヌと自ら呼ぶ民族が蝦夷ヶ千島に生活していた。アイヌ民族の歴史についてはまだ正確なことはわかっていない。ただ考古学等の成果に基づくと次のようになる。

「近世的なアイヌ文化や社会は、基本的には擦文期の社会や文化を大きな土台としながらも、12世紀ごろ擦文文化がオホーツク文化を吸収し、……かつそれを自己の伝統的な社会経済的基盤にあうように再編しつつ、また他方で和産物の多量な移入と、その日常生活での定着を媒介としながら、擦文期のそれとは異なった新たなものとして再編するかたちで成立した、と理解することができよう。」⁽²⁾

さらに、アイヌ口承文芸の歴史的な背景を考える時、「こうして13、4世紀以降のアイヌ社会は、物質文化・精神文化の両面において大きな変容をとげつつ、民族的なまとまりと

いう点でも、擦文期のそれとは異なった新たな段階を迎えたのである。つまり、アイヌ民族の形成である。」⁽³⁾

しかし、このアイヌ民族の形成は和人との共存を余儀なくされた。実態は和人の侵略・収奪との闘いが始まったことを意味していた。コシヤミンやシャクシャイン、クナシリ・メナシの闘いを通して、松前藩支配を含めた幕藩体制の成立と展開の中で、その後はアイヌ民族の尊厳が踏みじられた歴史であった。明治になっても引き継がれた。

現在アイヌ民族の言語を語ることができるのは明治30、40年代までに生れ育った方々である。その方々が残したテープや記録が現在記録化、学習されて後世に引き継がれようとしている。

一方、和人がいつ蝦夷島に定着したのかは正確にはわからない。しかし、次のように考えられる。「中世にも和人が渡来・定着があって、そこにはなんらかの集落ができていたと考えられる。しかし、コシヤミンの蜂起をはじめとする15、6世紀の和人とアイヌ人との武力衝突によって、それら集落は一掃されたと言われており、中世の集落が近世の和人の村に継承発展されていくことは、ほとんどまれでなかったかと思う。近世の和人地の村は、戦国から近世初頭にかけて渡来した本土の農漁民を草分けとして形成されたものである。」⁽⁵⁾

松前藩や幕府直轄を通して海岸線そして内陸部へと和人の移住が行われた。1869年(明治2)、北海道と呼称される頃には人口58,467人、世帯数12,017人になった。その後明治政府は国策として莫大な資金と人材、技術導入を注ぎ込み北海道開拓を始めた。そして、いろいろな目的と形態で日本全国から移住者がやってきた。兵農一如の理念のもとに北辺防備を兼ねた屯田兵、新生地を築かんとした武士団、宗教的理念に燃えた集団、一旗組や流

れ者、また自立を志す者、タコ労働者そして非人間的に強制連行されてきた朝鮮人・中国人などが短期間に移住して来た。安田泰次郎『北海道移民政策史』によると、1886年(明治19)から1922年(大正11)までの約40年弱の間に1都2府43県すべての地域から移住していることが報告されている。その中で、12,000戸以上の移住者を送り出した都県は14になっている。また、比較的少ない沖縄県でも41戸、宮崎県367戸、長崎県961戸となっている。職業別にしても、農業の約94万人をはじめとして約200万人が移住して来ている。これらの移住者(国衆と呼ばれる)が母村の生活文化を当然持ち込んで来ている⁽⁶⁾。

これらの移住者が持ち込んだ生活文化が「北海道」という自然と文化・歴史の中でどのように継承され、変容・定着していくかを探る課題は北海道文化理解にとっては基本的課題である。また、移住者が母村の影響を受けつつ新天地で創り出した生活文化、前述のアイヌ民族の文化との接触を通して創り出された生活文化がある。

第Ⅲ節 民話の性格・特質・伝承事情

「民話」に関連する言葉は以下の通り多種多様に使われている。「民間説話」「民話と伝説」「昔話と伝説・民話」「現代民話」「口承文芸」「お伽話」「伝承説話」「民族説話」「民譚」「遊離説話」「メルヘン」「フォークテール」「コント」「ポピュレール」というようにである。その分類・形式・モチーフ・性格・特質・伝承事情等が内容的にも歴史的にも地域的(世界・日本)にも異同がある。この問題を整理しようという試みが柳田國男・関敬吾・臼田甚五郎・大島建彦・福田晃・稲田浩二・野村純一諸氏によってなされてきた⁽⁷⁾。

この研究は、民話の発掘と映像化・記録化という資料収集の成果、世界規模での研究成果との関連でさらに包括的・内容的に深めら

れていく。現段階で歴史的経緯と分類内容を整理している臼田甚五郎氏・福田晃氏・木下順二氏の民話のとらえ方を参照しつつ、北海道の民話研究を念頭においた試論を提起したい。

●臼田甚五郎説⁽⁸⁾

「民俗学の学術用語としては、柳田國男により、「民話」はしりぞけられ、「昔話」が用ゐられた。昔話は民間の伝承資料に限られるけれども、民話は創作されたものをも並称してはばからない。しかし最近では民話をも伝承性の方に重さをかけて理解しようとする風潮が濃くなって来た。それは当然である。芸術的想像力が創作民話に美しい花を開かせることもあるけれども、他の創作文芸と区別して、民話と呼ばしめるものは、生活の根なし草に咲く花ではない。あくまでも生活に根をおろして伝承されたものの持つ質量感にあるからだ。創作民話に背を向けないまでも、人々はもとにもどって生活伝承の昔話に面を向けて来る。かういふ気持の転向の中で、民話の方が民謡と対位させて、耳に快くひびくやうになって来たと思受けられる。その場合、民話は昔話とイコールではなくて、昔話・世間話・笑話・伝説を含む総称として用ゐるのがよからう。民話とは、民間に民俗として伝承された説話である。民間説話では、学問上の概念をあらはす用語として曖昧に拡散されるおそれがある。その点、民俗説話の方が伝承性を明示する用語として適確である。」

●福田晃説⁽⁹⁾

「民話とは、民間に口頭で伝承されてきた説話、つまり民間説話(中国の「民間故事」、英米のフォークテール folk tale)の略称である。そしてそれは、民間の言語伝承の一分野に属するものであり、それゆえに民間に伝承されることと口頭で伝承されることの二つの面で、創造性を根幹とする「文学」と対峙す

ると言える。つまり民話は、特に選ばれた個人による創造的営みではなく、だれしもが共同体のなかで伝承・享受する民間の営みであると同時に、意識的な文字言語によらず、自然的な口頭言語によって伝達・聴取される点において特徴づけられるものである。

しかるに、文字言語の‘文学’に対峙する民話は、他方においてはその‘文学’の母胎となることも稀ではなかった。あるいは文字言語とかかわって、いちだんと豊かな伝承世界を構築している一面も存している。それほどに民話は、強い生命力を維持し、柔軟性に富み、未来に息づく可能性を有しているとも言えよう。」

●木下順二説⁽¹⁰⁾

「…「民話」ということばがいつごろからあるものかぼくは知らない。おそらく「民間説話」の略語だろうが、いずれにせよ近ごろ急造のことばではないだろう。ところでこの「民話」ということばに、民俗学でいう「昔話」と「伝説」と、それから「世間話」をまで含ませてよかろうとぼくは考えるのである。

3つのことばの学問上の区別を説明するのはぼくの任ではないが、簡単にいえば「昔話」はどこの土地へ持って行っても通用するいわゆるむかしばなしであるのに対して、「伝説」は具体的なある土地の何々山、何々ガ池の由来を説明するいつたえ、そして「世間話」は、……現実の中から生まれた話の断片で、一貫したストーリーを持つ「昔話」や「伝説」の一部分になるような小さいはなし、ということになるだろう。

これらの区別は、昔からのさまざまはなしを分類整理してその意味を明らかにするためにも、必要であることはまちがいない。だがぼくは、まずその前にこれらのすべてを一括して、そこにこめられている無数の名もない民衆の切実な感情とすぐれた知恵とを問題にする。…けれどもぼくの考える「民話」は

ただそれだけの内容にとどまるものではない。「昔話」がこれまで語りつたえてきたはなしであるのに対して、「民話」はそのことプラス、これからつくり出されて行くはなしという内容を持つ。」

上記3氏の民話論を引用した根拠は、以下5点の民話理解のための視点を含んでいるからである。

- 1) 言語伝承 文字言語に対して口頭言語である。また、口頭言語が文字言語に影響を与え、文字言語が口頭言語をさらに豊かにして語られる。
- 2) 時間伝承 人類発生から現代まで綿々と語り伝えられている。昔話から今話・ちよつと前の話が語られる。昔話から現代民話までの長い時代語り継がれている。また、未来に向けてのメッセージを語る。
- 3) 地域伝承 各地域の自然・歴史・文化によって話が変容し、定着し、発展する。昔話・世間話等は地域に限定されない話であるが、伝説は場所・人物が具体的である。しかし、地域にあつては昔話が伝説化されて語られている場合がある。また、地域の生活文化・芸能・民謡・語り物等の民俗伝承とも関連して民話は伝承される。
- 4) 文芸伝承 昔話・神話から諺・なぞなぞ・史実・開拓談として広範な人々の語りの中で伝承する。昔話の表現形式・構造・変化・主人公・テーマ等が時代的世界的に創意工夫されて語られている。史実・開拓談等も文芸化は低いが何十年かの時代を経てより高い文芸化された話として語られる可能性を持っている。その意味で色川大吉氏が言う民話のパン種である。⁽¹¹⁾
- 5) 表現伝承⁽¹²⁾ 祭祀者・古老・職業的話芸者・お爺・お婆が祭り・家族・談合等で神話・昔話・伝説・世間話・俗信・諺・なぞなぞ・史実・談話・逸話等を伝承し

ている。表現形式は異なるが周囲の人々や子供達に伝承している。内容も長い話から短い語句のものまで多種多様である。短い語句である「ことわざ」にしてもそのことわざが使用される状況がある。たとえば、「親辛苦して子楽し孫ハチ(蔵)開く」ということわざは、空知・雨竜町の農業Gさんは、孫爺さんから「お前は三代目だから心して一生懸命働け。親から引き継いだ財産をしっかり守れ。もし財産をなくした場合は豆腐屋をやれ。豆腐屋は朝早いから三文の得をする。」と⁽¹³⁾言われたと報告している。ことわざ自体は短い語句だが家族生活の中で語られると長い話とその背景にある。表現の形式は異なるが神話や昔話・伝説等と内容は同質である。同様なことが「なぞなぞ・俗信」にも言える。

以上の視点から、私は「民話」の性格・特質を以下のように考える。

民話は 口頭伝承の文芸である。しかも民衆・庶民の語りを背景にしている。語りは変容しながら成長し、定着しました変容して後世に語り継がれて行く。 地域・家族の中に語りの場があり、基本的なモチーフを維持しながら周期的に伝承されて行く。 近代になり学校教育が発展すると文字文化は普及するが、語りは無文字文化を基本的には背景とする。

過去への郷愁のみならず未来へのメッセージを秘めている。劇・絵本・映画・テレビ・読み聞かせ等を通しての再話活動としても発展している。

次に、内容的には私は⁽¹⁴⁾に分類している。

- 1) 神話 2) 昔話(笑話も含める。) 3) 伝説
4) 世間話 5) 俗信 6) なぞなぞ 7) ことわざ 8) 語り物 座頭・ゴゼ唄、祭文語り、浪花節、講談、義太夫、浄瑠璃等 9) 呪文 10) 祝詞 11) 歌謡 わらべ唄、地唄

- 等 12) 談話・逸話 開拓話等 13) 史実 14) 現代民話 今話、ちょっと前の話、戦争話等

これらの民話は、時には所作や楽器や道具・棒等を使用して語られる。また、昔話は形式があり、特定の地域にこだわらない。それに対して伝説は特定の場所・人物等が登場する。世間話は形式・場所・人物等にこだわらず、そんなことはありえないと思いながら話に引き込まれて行く話である。狐に騙された話、幽霊話等がその例である。上記三話を口承文芸と分類している。 さらに、北海道はアイヌ話、本州から伝承された話、新天地で創り出された話というように本州と異なる伝承事情・自然・歴史がある。

これらの性格・内容・伝承事情等を考慮して「民話」と私は⁽¹⁴⁾定義している。

●民話の分類

歴史的にも内容的にも現段階までの研究成果を紹介している福田晃・常光徹・斎藤寿始子編『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社2000年10月 総説4 - 59P、福田晃編『民間説話 日本の伝承世界』世界思想社1989年三月8 - 35Pを手掛かりに現段階の民話内容からの分類を試みたい。

[神話]

「神話はフィクションというより、まさに心理を表現しているのである、というのも、神話が語っているのは、もっぱら現実だけだからである。」「神話は、世界や人間や生物が超自然的な起源と歴史を持っていること、また、この歴史が意味深く貴重で模範的なものであることを教えてくれるのだ。」(金光仁三郎)⁽¹⁵⁾

福田晃氏は、民間神話の分類を以下のように提示している。

- (1) 宇宙の起源 「天地分離」「月と太陽」など。

- (2) 神々の起源 「ミルクとサーカ」「雨の神と竜宮の神」など。
- (3) 国土の起源 「アマンチューの足跡」「流れる島」など。
- (4) 神々の島建(「国土創造」+「夫婦の始まり」+「農耕起源」) 「奄美の島建国建」「宮古島の始まり」など。
- (5) 人類の起源 「兄妹始祖」「犬婿始祖」など。
- (6) 神の子・神の嫁 「蛇神の子」「天女の子」「太陽神の嫁」など。
- (7) 文化の起源 「火種子」「鶴の穂落し田」「五穀の始まり」「舟の始まり」など。
- (8) 祭事の起源 「ヤーマス御願由来」「マユンガナシ由来」など。

<いずれにしても、およそは「宇宙の起源」「人類の起源」「文化の起源」と三分類される創世神話に属するもので、英雄神話の要素の稀薄であることが問題となろう。……寺社縁起・本地物語やアイヌ民族の神話伝承も考慮しながら、本土に埋もれた伝承資料を含めた民間神話の整理・分類が、今後⁽¹⁶⁾に期待されることである。>と福田晃氏は述べている。

私は北海道民話の神話を考える時、福田氏が指摘するようにアイヌ民族の神話がどのように分類されるか、和人が神話をどのように伝承していたかを研究するのが今後の課題である。

[昔話]

神話は現実にあった話として伝承するが、昔話は虚構の世界として伝承する。しかし、虚構の世界は現実世界の反映でもある。現実世界の喜怒哀楽が文芸化されているのが昔話である。その昔話の世界を分類(インデックス)した2つの成果を紹介する。

1つは、関敬吾・野村純一・大島廣志編『日本昔話大成』(全12巻)角川書店1980である。第11巻昔話の型から紹介すると以下のようになる。

動物昔話

1. 動物葛藤 2. 動物分配 3. 動物競走
4. 動物競争 5. 猿蟹合戦 6. 勝々山
7. 古屋の漏 8. 動物社会 9. 小鳥前生
10. 動物由来 11. 新話型

本格昔話

1. 婚姻・異類贅 2. 婚姻・異類女房
3. 婚姻・難題贅 4. 誕生 5. 運命と致富
6. 呪宝譚 7. 兄弟譚 8. 隣の爺
9. 大歳の客 10. 継子譚 11. 異郷
12. 動物報恩 13. 逃竄譚 14. 愚かな動物
15. 人と狐 16. 新話型

笑話

1. 愚人譚 2. 誇張譚 3. 巧智譚
 4. 狡猾者譚 5. 形式譚 6. 新話型 7. 補遺
- 大分類3, 中分類35, 小分類728の分類構成になっている。

2つは、稲田浩二・小澤俊夫責任編集『日本昔話通観』全29巻研究編2巻同朋舎である。その内の第28巻が「昔話タイプ・インデックス」1988になっている。分類は次のようにしている。

第1部 むかし語り

1. 人の世の起こり
2. 超自然と人<人の世><来訪神>
<授福><処罰>
3. 異郷訪問<竜宮><地下の国>
<山野国><天上の国>
4. 天恵
5. 呪宝
6. 誕生<異常誕生><運命的誕生>
7. 兄弟話<兄弟の競争><兄弟の対立>
<兄弟の協力>
8. 継子話
9. 婚姻<異類婿><異類女房>
<婚姻の成就>

10. 靈魂の働き <生霊> <死霊>
 <生まれ変わり>
11. 厄難克服 <賢さと愚かさ> <逃走>
 <悲運>
12. 動物の援助
13. 社会と家族
14. 知恵の力

第2部 動物昔話

15. 動物前生 16. 動物由来 17. 動物葛藤
18. 動物競争 19. 動物社会

第3部 笑い話

20. 賢者と愚者 21. おどけ・狡猾
22. くらべ話 23. 愚か者 24. 愚か婿
25. 愚か嫁 26. 愚か村 27. 誇張
28. 言葉遊び

第4部 形式話

29. 形式話

大分類4, 中分類29, 小分類1211に分類されている。福田晃氏は上記2つの成果を評価しつつ、今後の課題を提起している。⁽¹⁷⁾

...「この「通観」のタイプ・インデックスによって、近代日本における伝承昔話のおよそを大系的に把握できることになったと言える。.....伝承資料の位相の検討はきわめて困難なことであれば、「分類案には話型・話群のモチーフという客観的分析とともに、主題・思想という主観的判断をも要請される」「その主観性を克服するには、昔話を越えた民間説話の分類案を追求することが要請されるであろう。」また、高木史人氏が指摘する岩波講座『日本文学史』第17巻20pのように「単純に、<口承>という枠組みだけで昔話を捕捉できるという状況にない。」

私は現在北海道内で採録されている昔話が

上記の特に「通観」の昔話分類とどう関連しているかという問題は「通観」との単純な比較だけでは処理されない問題を持っていると考えている。アイヌ民話との関連、事例の発掘、地域・家族伝承との関連等の総合的な把握が今後の課題である。

[伝説]

『日本伝説大系』全15巻別巻2巻みずうみ書房は、高木敏雄『日本伝説集』や柳田國男『日本伝説名彙』等の分類作業の成果を踏まえたものである。私は第1巻北海道・北奥羽編に関わった。その分類・配列を提示したい。

主題設定を、<文化叙事伝説> <自然説明伝説>の2つに大分類している。

<文化叙事伝説>

1. 人類創成 2. 始祖 3. 先住者 4. 巨人
5. 他界 6. 神・神事・神仏・人身御供
7. 英雄 8. 精霊

<自然説明伝説>

9. 星 10. 月 11. 山 12. 木 13. 石
14. 草 15. 魚 16. 祠堂 17. 金

上記のように第1巻は17の中分類、48の小分類がなされている。アイヌ民話も含まれている。『日本伝説大系』全15巻の小分類は1446の伝説が収録されている。また、「類話・参考」として類似の伝説紹介・解説がなされている。

この分類を参照にしながら、北海道の伝説分析作業が今後の課題である。

[世間話]

世間話を、『東京都大田区史(資料編)民俗』1983年(昭和58)8月 468P~は、次のように説明している。

「世間話といわれる内容の話は、昔話とは異なって、素材も豊富であり、話し方も自由自在である。世間話の素材は、昔話や伝説から取り入れたものもあるが、大部分は不思議な珍しい話、いわゆる奇事異聞で占められている。話し手は、変わった珍しい素材を、その場その場の聞き手や土地柄に迎えられるように、自由なもの言い話していく。いわば噂話的なものが多いのであるが、話の素材や構成も固定化し、各地に共通する型さえ生まれている。話のなかには、特定の地名や人名を織り込み、その地にふさわしい森や川や山、家や人を配し、事実談・経験談として、まことしやかに話されるものが多い。このような世間話には、その時代、その地域社会に生きてきた人々のさまざまな生活感情や、自然観などが映し出されている。」

民話研究の中でもっとも後れているのが世間話研究である。しかし、1989年（平成元）の「世間話研究会」発足から組織的に研究されるようになった。機関紙も現在迄第12号になっている。

福田晃氏は3つの「世間話」の分類を紹介している。

1つは、大島建彦氏監修の『富士吉田の昔話・伝説・世間話』（富士吉田市郷土館調査報告書第2集）富士吉田市郷土館、1985 109 - 168Pの山田巖子氏編集＜世間話編＞の分類である。

． 動物

1. 狐火 2. 狐<化かす><化ける>
<狐憑き><.霊力><.呪術><鳴き声>
3. クダ狐 4. ムジナ 5. 蛇 6. ヤマメ
7. 猫 8. 狼
- ． 妖怪（霊異）
9. 植物の怪 10. 山の怪 11. 道の怪
12. 水の怪 13. 産の怪 14. 隠し神

15. 霊魂 16. 蘇生 17. 夢告 18. 祟り
19. 予兆 20. 幽霊 21. 再生
- ． 神仏
22. 霊験 23. 祟り 24. 障り 25. 禁忌
26. 怪異
- ． 人
27. 呪術 28. 頓知 29. 身分 30. 臆病
31. 名人 32. 乞食
- ． 家
33. 資産家 34. あだ名
- ． 村
35. 飢饉 36. 米の力 37. 処刑

大分類6, 中分類37, 200の世間話が収録されている。

2つは、中島恵子氏の編集された『中野の昔話・伝説・世間話』（中野の文化財No.11口承文芸調査報告書）世間話 59 - 138P, 160 - 187P 東京都中野区教育委員会1987 の分類である。

． 動物

1. 「狐」<狐火><狐が化かす（化けたり、見せたり）><馬の糞団子><風呂は肥溜><おお深い><道迷い><とられる（戸をたたく・迎える・知らせる狐）><狐の仕返し・狐をだます><狐よけ><狐憑き><宝珠の宝><狐の生態>
2. 「狸・ムジナ」
3. 「猫・犬・馬・鶏など」
4. 「蛇・蛙など」
- ． 5. 植物
- ． 6. 気象・天体
- ． 霊異・怪異
7. 「妖怪」 8. 「あやしい場所」 9. 「火柱」
10. 「カネ玉」 11. 「人魂」 12. 「死の前知らせ」
13. 「生き返り」 14. 「生まれかわり」
15. 「神仏など」<神仏の功德と祟り>
<祟り><神隠し><呪術・俗信>

- ・ 人・家・村
- 15. 「名主定兵衛さん」 16. 「横山八段」
- 17. 「車屋のだんな」
- 18. 「曾祖父さんは剣術の使い手」
- 19. 「名をあげた人々など」 20. 「あだ名など」
- 21. 「力持ち・力比べ」
- 22. 「大食い・食い比べ」
- 23. 「屁の名人・屁こき比べ」
- 24. 「一物自慢・一物比べなど」
- 25. 「ノミの夫婦」 26. 「けちんぼ」
- 27. 「機知など」 28. 「あわて者など」
- 29. 「奇人など」 30. 「ばくち打ちなど」
- 31. 「乞食」 32. 「村気質など」
- 33. 「村の事件など」
- ・ 世相・歴史的事件34

大分類6, 中分類34, 686の話数が収録されている。

3つは、福田晃氏の説である。

- ・ 神仏の靈異
- A. 靈異 B. 功德 C. 崇り
- ・ 妖怪の奇異
- A. 妖怪 B. 変化 C. 死霊
- ・ 動物の不思議
- A. 習性 B. 報恩 C. 報復
- ・ 人間の運命
- A. 非運 B. 幸福 C. 因縁
- ・ 人間の異常
- A. 行為 B. 性格

上記の他に、私は「川崎の世間話」調査団『川崎の世間話』川崎市市民ミュージアム 1996年(平成8)3月の報告書に注目している。地域と人・場所などの関連によって語られる世間話集であるという点である。世間話はさまざまところで語られていることを証明している。

「中学校の同級生にファミリーレストランで怖い話をしてもらう」「宮前区・高津区・中原区で、幸区・川崎区で、麻生区・多摩区

で世間話を聞く」「地域のことに詳しいと近所で紹介された男性を訪ねる」「寺で紹介された旧家に話を聞きに行く」「町内会の役員に案内され、広く知られる郷土史家を訪ねる」「旧家の並ぶ地域で親戚や近所の人も交えての話を聞く」「地元で発行されている雑誌に郷土の民話を紹介している男性を訪ねる」

上記は、世間話を訪ねて歩いた「調査者と話者との間に生まれた話の記録である。……聞き手と話者の出会いのあり方、その延長で共有する1回きりの、ある<場>の関係のなかから立ち顕れる言説は、その言説がさまざまな経緯や状況と切り離せない。」と常光徹氏が同書17Pで指摘する点は、今後の世間話研究の姿勢を提示している。

北海道民話の採訪の中では世間話が収集されるが、上記の成果を参照しながら世間話の(分類)をさらに研究しなければならない段階である。世間話の収集・整理・分析の作業を総合的にしなければならない段階である。

しかし、野村純一氏が『日本の世間話』東京書籍(株)1995年(平成7)2月12Pで指摘している研究方法・問題意識に留意したい。

「世間話とはつねづね『道聴塗説(どうちようとせつ)の文芸』だと心得ているかである。昔話や伝説と共に民間説話の一翼を担うものとして位置付けている。常民の文芸の一斑だといってもよい。これからして、仮に広く世間に行われる例があっても、それをもってすべて論議の対象にすえようなどとはまったく考えていない。ただしこのとき、そこでの規準を話の構造とか枠組などに求めると、ことは少々曖昧になってくる。手続きとしてはそれよりはむしろひとつテーマ、もしくはモチーフのもとにそれがそこに顕在化していると判断した場合、進んでこれを拾い上げ、その上で改めて俎上にのぼらせるのがよいと思っている。話はしばしば時間的、空間的な距離、

時空を超えて存在すると理解しているからである。抽象的にいってもはじまらない。」

[俗信]

板橋作美氏は俗信の研究現状をその著書『俗信の論理』の中で次のように述べている。

「俗信の研究については、俗信全般にわたる井之口章二の研究をはじめとするすぐれた考察がいくつかあるものの、民俗学のほかの分野、あるいはほかの信仰にくらべると、俗信研究はすすんでいると言えない。……民俗誌のレベルでは大きな扱いを受けていながら、研究書となると数は少ないし、民俗学の概説書や講座ものでも、俗信はほんのわずかのページしか与えられていない。」⁽¹⁸⁾「いわゆる俗信は、ほんの数十年前までは生活のさまざまな場面で口にされた。それらは、たわいもない言葉遊びであったり、村の物知りや御幣かつぎのとるにたりない知識にすぎないことが多いが、ときにわ道德規範、社会規範として人びとの行動を律したり、まよったりしたときの判断基準や指針にもなっていた。⁽¹⁹⁾」そして板橋作美氏は同書で俗信研究試論を提示している。「1. はじめに 2. 俗信のとらえかた 3. 俗信の仕組み 4. 文化の論理」である。

また、花部英雄氏が『昔話 研究と資料 第28号昔話と俗信』日本昔話学会平成12年 で、「俗信研究の現況」49P～を考察している。これらの研究を参考にしてさらに研究を進めなければならない課題がある。

[ことわざ]

小学館『故事・俗信 ことわざ大辞典』1982年(昭和57)2月は、(1) 故事 (2) ことわざ (3) 慣用句 (4) 俗信・俗説 (5) ことば遊び・しゃれ・和歌・俳句・川柳などの5つに分類し、約43000項目を収録している。「この国土に生きた人々の姿を日本のことば、民俗という視点で捕らえるための参考として、

またひとつには、社会のひずみ、歪んだ発想や偏見、人間の業の深さを見る資料として、つとめてわかりやすく配列しました。歴史的事実を現代に反省の糧として、よりよき対応を生むことを念願いたします。」と辞典の「発刊にあたって」で述べている。

この他に、高橋秀治『動植物ことわざ辞典』東京堂出版では、305種3200のことわざや慣用句が収録されている。豊島健吾『故事・ことわざ ものしり辞典』大和出版1987年(昭和62)、朝日新聞科学部『ことわざ医学辞典』朝日文庫1987年(昭和62)、最近では時田昌瑞『岩波ことわざ辞典』岩波書店2000年(平成12)10月が1500項目を収録している。古くは藤井乙男『諺の研究』京文社書店1938年(昭和13)12月がある。この本は1906年(明治39)5月『俗諺論』富山房の改版である。

当然上記の成果を参考に、北海道のことわざの収集・研究がなされなければならない。

本論では、北海道関係の主要参考文献・資料を列挙するのに止め、今後の課題としたい。

佐藤三次郎「北海道幌別漁村誌」アチック・ミュージアム1938

桜井敬一「漁村民俗風土記」桜井社会調査研究室1968

矢島睿「北海道の祝事」明玄書房1978

矢島睿「北海道の葬送・墓制」明玄書房1979

山田健他「北海道の生業・漁業・諸職」明玄書房1981

調査資料には、久保孝夫氏の市町村史・誌(妹背牛町、伊達市、門別町、本別町など)の報告、熊石町青年団体協議会『北国くまいしおもしろ言葉(ことわざ・言い伝え編)PART 4』がある。

これらの北海道のことわざ・俗信などを意識して、わたしは次のような仮分類を試みている。

暮らしの中の言い伝え

北の迷信・俗信・ことわざ

I. げんき (健康)

1. 病気 2. 療法 3. 身体 4. 人相
5. 性格

II. かいてき (生活)

6. 食べ物 7. 住まい 8. 服装

III. きずな (家庭)

9. 親子 10. 子育て 11. 兄弟姉妹
12. 男女

IV. きまり (儀礼)

13. 出産 14. 成人 15. 結婚 16. 厄年
17. 葬式

V. なりわい (生業)

18. 漁業 19. 農業 20. 林業 21. 工業
22. 鉱業

VI. とみ (財産)

23. 金運 24. 不運 25. 貸借

VII. めぐみ (自然)

26. 天文 27. 気象 28. 時間 29. 方角
30. 暦

VIII. たすけあい (動植物)

31. 花 32. 魚 33. 鳥 34. 昆虫

IX. しきたり (社会)

35. 年中行事 36. 助け合い 37. 勝負

X. あんしん (信仰)

38. 占い 39. 縁起 40. 呪術

上記は札幌市の民話「やまんばサークル」会員13名に書いてもらったものを10項目に分類したものである。大分類の10も、中分類の40も、240話のことわざ・俗信の聞き取りもまだ不十分である。しかし、今後の研究の基礎となるので、口承文芸資料集第九号『北の語り』特集暮らしの中の言い伝え 北海道口承文芸研究会1996年(平成8)からそのまま転載した。

わたしの北海道民話の研究は以上である。前述したように、民話の世界は内容的に14に

わけられる。わたしは「なぞなぞ・語り物・呪文・祝詞・歌謡・談話・逸話・史実・現代民話」についてはまだ研究に未着手で、今後の課題である。

第IV節 北海道民話研究小史

小史としたのは次のような事情による。第節.問題の所在の項目で 北海道文化は1. アイヌ文化 2. 和人文化 3. アイヌと和人の複合文化 4. オホーツク文化 5. 山丹文化 6. 北前船文化 7. 海外文化によって成り立っている と論じた。私の北海道民話研究史は、まだ 2. 和人文化における民話研究史素描にしか到達していない。したがって本論は、現時点で把握している和人民話文献・資料、研究者紹介を中心にして論じたので小史とした。

明治以降現代に至るまで、和人の手に成る北海道民話集を管見すると北海道全般(アイヌ民話を含めて)を視野において編集したものはきわめて少ない。

その中で特筆される民話集が、更科源蔵・渡辺茂編著『北海道の伝説』札幌 柏葉書院1952年(昭和27)である。285話が採録され、北海道全域にわたっている。出典も1868年(明治元)以前の「北辺資料」、そしてそれ以後の伝説資料が多く収録されている。その意味で、1952年以前の民話資料・研究者の動向を探ることができる。編者のひとりである渡辺茂は、その後和人民話を抽出し、同一内容で『北海道の伝説 和人編』1956年(昭和31)『北海道の伝説』1976年(昭和51)という形でそれぞれ別出版社から刊行している。義経伝説36話、それ以外の和人伝説98話合計134話が収録されている。

そこで本論では更科源蔵・渡辺茂編著『北海道の民話』を手がかりにして近世文書、1868年以降現在に至るまでの民話資料について紹介したい。

1. 近世の「北辺資料」⁽²⁰⁾

1) 地理・紀行関係

- 板倉源次郎『北海随筆』1739
 ? 『津軽見聞記』1758
 平秩東作『東遊記』1784
 蛎崎広時『松風夷談』?
 淡斎如水『箱館夜話草』1857
 市川十郎『蝦夷実地検考録』1858?
 大内餘庵『東蝦夷夜話』1861
 高橋重賢他『北藩風土記』『松前随商録』
 1801
 古河古松軒『東遊雜記』1788
 菅江真澄『蝦夷喧辞辯』『えみしのさへき』
 1789
 谷元旦『蝦夷山川地理記行』1799
 嶋田熊次郎『天辺飛鴻』1854
 松浦武四郎『石狩日記』『知床日記』『西蝦
 夷日誌』『東蝦夷日誌』1860～『友恭君蝦
 夷紀行』1864
- 2) 歴史
- 松前景広編『新羅之記録』1646
 ? 『快風丸記事』1689
 最上徳内『蝦夷草紙後編』1800
 鈴木善教『蝦夷旧聞』1854
 近藤重蔵『続蝦夷草紙』1804

上記の文献から抽出して、北海道各地別に整理したのが渡辺茂氏である。しかし、文献抽出箇所の明示が不鮮明なため、その箇所を確認しているのが現段階である。また、上記文献以外にも今後調査することが課題である。

2. 深瀬春一氏とその研究

深瀬春一氏の編著書は次の通りである。

- 『旅と伝説』東京 三元社 掲載
 「鯨に関する伝説」2巻10号 1929 (昭和4)
 「道南樹木伝説」3の4
 「北海道に於ける善光寺伝説」3の7
 「松前怪談十種」3の10
 「伝説の福山」4の9

「奥尻島紀行」4の12

「江差の旅」6の8

「松前伝説」<札幌放送局編『北海道郷土史研究』1932年(昭和7)10月P 1948年改題『昔話北海道』として同内容で刊行する。>
 『松前怪談 門昌庵異聞』大阪ラジオ画報社8の10
 『伝説上の渡島』近代函館 1934年(昭和9)
 『蝦夷地に於ける和人伝説攷』間瀬印刷所出版部1936年(昭和11)3月<北海道函館師範学校校友会発行のものを改竄、増補したもの>

深瀬氏は、上記のように精力的に民話の収集と研究に取り組んでいる。その範囲は北海道南部に限られているが、民話資料の分析に民話研究の先駆者としての努力のあとがみられる。深瀬氏は1898年(明治31)京都に生まれ、1926年(大正15)早稲田大学を卒業。その後北海道函館師範学校歴史科担当教師になる。函館史談会・函館郷土研究会の中心として活躍し、郷土教育の一環としての民話研究の先達である。惜しむらくは39歳の若さで1936年(昭和11)死去する。

3. 札幌放送局主催「北海道郷土史講座」

(『北海道郷土史研究』1932年(昭和7)10月として刊行)

講座は、1928年7月～1929年2月、1931年4月～10月の間開催された。当時の北海道を代表する研究者が講演者であった。

以下がその内容である。

- アイヌの伝説について (吉田巖)
 屯田兵古老物語其の1 (我孫子倫彦)
 同上 其の2 (名越源五郎)
 義経の蝦夷逃避行 (橋本亮尚)
 松前伝説 (深瀬春一)
 函館の昔噺 (宮崎大四郎)
 小樽の昔噺 (橋本亮尚)

4. 『北海道文化史考』札幌中央放送局編輯兼
発行 1942年 (昭和17) 2月

アイヌ民族の精神生活 (名取武光)

松前文化について (高倉新一郎)

維新前後の箱館を中心とする文化 (岡田健
蔵)

北海道の農民信仰 (小林巳智次)

北海道の俚謡と民謡 (河合裸石)

上記の3. 4. は、民話に関連するものを抄
出したものである。これらの取り組みが『昔
話北海道』北方書院1948年 (昭和23) へと継
承された。また、1955年 (昭和35) 以降の
「郷土資料シリーズ」札幌中央放送局放送部
へと継承された。「郷土資料シリーズ」の民
話関係資料を抄出すると次の通りである。

「北海道の俚民謡」第2号1955年12月

「ギリヤーク」第10号1956年8月

「北海道の舞踊」第19号1958年5月

「雪」第21号1958年12月

5. 北海道庁編 『北海道の口碑伝説』日本教
育出版社 1940年 (昭和15) 3月

本書は昭和14年12月「時局下道民の郷土愛
を昂め、道史傍證の一助たるを得ば甚なり」
(序) という意図のもとに刊行された。地域
の多寡はあるが、北海道全域にわたって民話
が収集され、203話に及んでいる。15年戦争
の時局下とはいえ、昭和10年代、地方自治体
として、民話の収集に取り組み、刊行された
意義は大きい。

6. 須藤隆仙 『南北北海道を中心とする伝説考』
私家本1970年 (昭和45) 3月

本書は翌年5月『北海道の伝説』として山
音文学 (装丁に2種類ある) から再版されて
いる。「南北北海道」とあるように渡島半島、
胆振地域の民話を収録している。「細かいも
のも入れれば約二百余の話を集めて解説して
みたが、筆者の考えで適宜広略をあんばいし

た」内容になっている。

7. 宮田登編 『日本伝説大系 第1巻北海道・
北奥羽編』みずうみ書房1985年 (昭和60) 11月

本書は「基本的にアイヌの世界を十分に押
さえながら、伝説を通して北海道に栄えた文
化複合の実相をとらえるよすがとなればとい
う気持ちが働いた。そこでユーカラをはじめ
として、広い意味での民話類をかなり多く集
めることになったのである。」(あとがきより)
和人民話は13話収録されている。類話・参考
話もあって各民話の理解を助けてくれる。分
類も現在までの研究成果をもとに日本各地と
の比較検討もできる。

9. 『北海道開拓記念館研究年報』・『研究報告』・
『調査報告』 矢島睿氏の報告

『ニシン漁場における習俗の定着過程につ
いて』研究年報第3号 1974年3月

「離島社会の歴史と文化」、漁民の信仰と
年中行事」研究報告第8号 1988年3月

「離島社会の歴史と文化 昭和57年度中間
報告 礼文町における神社信仰について」
調査報告第22号 1983年3月

「積丹半島の自然と歴史 昭和63年度中間
報告 古平町沖村における通過儀礼 八反
田善助氏聞き取り資料」調査報告第28号
1989年3月

矢島氏は日本海沿岸・離島の漁村に伝承さ
れている俗信について報告している。これら
の成果が以下の編著書に反映されている。

『北海道の祝事』明玄書房1978年

『北海道の葬送・墓制』明玄書房1979年

『日本の鯨漁』マリン企画 1980年

『北海道の生業2漁業・諸職』明玄書房
1981年

『北海道の研究第7巻民俗・民族』清文堂
1985年

9. 北海道みんぞく文化研究会の活動

機関紙『北海道を探る』に現在までの口承文芸に関する活動が報告されている。現在まで32号が発行されている。口承文芸の分野を設けて精力的に取り組んでいる。第7号までは阿部敏夫・谷百合子・福井淳各氏が調査報告し、第10号以降は久保孝夫氏を中心となって「昔話・伝説・世間話・ことわざ・俗信・わらべ唄」を調査報告している。『昔話通観』との比較、伝承事情なども記録され貴重な資料である。また、久保氏は各地域の市町村史・誌編集にも関わり、その地域の民話の掘り起こしに関わっている。

10. 北海道口承文芸研究会の活動

機関紙『北の語り』に現在までの活動が報告されている。現在まで11号が発行されている。北海道全域に散在する会員がその地元の「昔話・伝説・世間話・俗信・ことわざ・民謡・聞き書き・言い伝えなど」を報告している。これらの報告成果が、『北海道昔ばなし』中西出版19年、『北海道義経伝説序説』響文社2002年となっている。

11. 北の生活文庫企画編集会議編『北海道の口承文芸』北の生活文庫7 北海道1998年

高橋宣勝・奥田統己・久保孝夫各氏の共著である。「アイヌ民族が語り継いだ口承文芸」「和人の口承文芸」の2部に分類されている。和人の口承文芸では、各地の伝説・義経伝説・江差の繁次郎話・世間話・学校の怪談話が収録されている。

以上11. 項目に絞って北海道の和人民話の文献・研究者について素描した。これらの作業の延長上に本格的な北海道民話研究史がある。

上記の他に昭和初期から30年代にかけて刊行された例えば、『北方郷土』『北方時代』

『蝦夷往来』『北海道倶楽部』『北方研究』『北海道春秋』『旅と伝説』『北方風物』『北方文藝』『北方叢書』などの雑誌・叢書類の中に散見する民話の発掘などの作業がある。また、児童文学・郷土教育教材・各自治体の市町村誌史、ふるさと読本、ふるさと絵本、郷土研究会、個人発行の民話集の収集・検討作業がある。家庭文庫・読み聞かせ・民話の語り・図書館活動などの中の民話の再話活動の状況把握の問題もある。

まとめ

本論は現段階の北海道民話の研究状況を整理したものである。しかし、この研究はまだ緒についたばかりである。どの項目も不十分である。また、アイヌ民話の分類内容、研究史検討などまだ私は未着手である。課題は多い。⁽²¹⁾

なお、本論は2001年度北星学園大学特別研究費による研究報告でもある。

[注]

- (1) 拙稿『北海道からの視点』(宮田登編『現代民俗学の視点第3巻民俗の思想』217 - 228 P)
- (2) 榎森進『アイヌの歴史 北海道の人びと2』(日本民衆の歴史 地域編8 三省堂 1987年 48 P)
- (3) 前掲書 55 P
- (4) 「和人との共存」という意味は、17世紀段階のアイヌ社会と松前藩との関係を目指す。海保嶺夫『日本北方史の論理』雄山閣1974年 89 - 91 Pに論述されている意味で「和人との共存」を使用している。
- (5) 桑原真人編『開拓のかげに 北海道の人びと1』(日本民衆の歴史 地域編7) 三省堂 1987年 25 P
- (6) 拙編著『北海道の「口承文芸」 和人文献目録』サッポロ堂書店 1992年2, 3 P

- (7) 関敬吾「民話と伝説」(『國文学 第21巻 15号』学燈社1976年11月臨時増刊号79 P ~
- (8) 『國文学 解釈と鑑賞』1975年11月 26 P
- (9) 福田晃「民話とは何か」(福田晃・常光徹・斎藤寿始子編『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社2000年 4 P)
- (10) 日本民話の会編『民話の発見』大月書店 83 - 85 P
- (11) 「現代の民話の形成過程」(網野善彦他編『歴史学と民俗学』<日本歴史民俗論集 1>吉川弘文館) 305 P
- (12) 「表現伝承」という語は私の造語である。民話の語り手が多種多様な表現方法で伝承しているので仮に使用した。
- (13) 拙稿「口承文芸考 豊里・洲本地域の民話」(『北海道を探る』第7号北海道みんぞく文化研究会 1985年3月 202 P)
- (14) 本論の他に「民話」についての考察に関しては、『日本伝奇伝説大辞典』角川書店の川端豊彦氏の解説がある。木下順二・関敬語・柳田国男諸氏の民話に対する見解と民話使用上の問題点を紹介している。
- (15) 『世界神話大辞典』大修館書店 4 - 6 P
- (16) 福田晃編『民間説話 日本の伝承世界』世界思想社 1989年3月 16 P
- (17) 前掲書 29 P
- (18) 板橋作美『俗信の論理』(民俗宗教シリーズ) 東京堂出版 1998年9月 6, 7 P
- (19) 前掲書 2 P
- (20) 北海道大学付属図書館編『日本北辺関係旧記目録』1990年7月 を参照する。
- (21) 民話研究の方向・方法については、今回触れることが出来なかったが、今後の私の研究のためにも花部英雄・高橋吉文両氏の研究方向・方法を紹介しておく。
花部英雄氏
「昔話踏査・研究の現在とこれから」(『國文学・昔話 通底するフォーク・テイルズ』126 P 平成11年12月 第44巻14号) から

1. 近代における昔話研究の軌跡
2. 歴史地理的研究の現在
(含む比較研究)
3. 生物学的方法の現在
4. 構造的研究の現在
5. 心理学的方法の現在
6. 昔話研究のこれから

高橋吉文氏

『グリム童話 冥府への旅』6, 7 P 白水社
1996から

表層アプローチ

1. 表層の内容分析・批判
民俗学的, 伝説的, 歴史・社会学的考察, 近代制度批判, フェミニズム, 人生論的読解

2. 表層の文体分析

様式研究(リュウティ), 話型比較(アルネ)

深層アプローチ

1. 深層の内容分析
深層心理学的分析(フロイト派, ユング派), 象徴分析, 神話学派
2. 深層の形態論的記号分析
統辞的形態分析(プロップ, プレモン)
範列的分析(レヴィ=ストロース)

阿部敏夫関係引用・参考文献一覧

『北海道の「口承文芸」 和人文献目録』
サッポロ堂書店 1992年5月

『北海道の「口承文芸」 資料集1』響文社
1987年6月

『現代民俗学の視点 第3巻 民俗の思想』
朝倉書店 1998年4月

『民話創造ノート 北海道の視角から』
野薔薇舎 2000年10月

『日本伝説大系 第1巻 北海道・北奥羽編』
みずうみ書房 1985年11月

『北海道昔ばなし』4分冊 中西出版 1989
年8月

